

昆明方言における単字調および“軽声”を伴う二音節語の調形*

樋口 勇 夫

0. はじめに

樋口(2004)では、漢語諸方言における声調とストレスアクセントとの関係を、実験音声学的手法によって明らかにすることの一環として、漢語北方方言13種における単字調形と後字軽声二音節語調形とを比較し、両者の関係を探った⁽¹⁾。

本稿では、樋口(2004)同様、実験音声学的手法により、岩田(1999・2001)の見解に基づいて、昆明方言における、単字調形と所謂“重い軽声”を伴う二音節語調形とを比較し、両者の関係を探る⁽²⁾。具体的な実験方法としては、昆明方言の音声データを音声分析ソフトで分析し⁽³⁾、両者のピッチ(F0)および音節の長さを比較する。

岩田(1999:147-148, 152-156)・(2001:24, 25-26)では、江蘇省連雲港方言の3種の軽声一前者では“Ⅰ類・高降・Ⅱ類”，後者では“LS(2)・LS(3)・LS(1)”と呼ばれている一は、歴史的にこの順でストレスの左移動を生じた結果で、

ストレス左移動の順		①	②	③
後字のタイプ		“right spreading”	“高降”	“既定値”保存
前字調類	単字調値	Ⅰ類=LS(2)	高降=LS(3)	Ⅱ類=LS(1)
陰平	214	214+5	214+41	214+1
陽平	24	21+5	21+41	24+1
入声	24	21+5	21+41	44+1
去声	45	44+5	44+41	45+1
上声	41	41+1	- - -	44+1

①は軽声の“既定値”(“低”という“声域特性”)まで失われてしまった“right spreading”(前字上声を除く)、②は“上声(41)”という特定の声調の声調特性を獲得した“secondary tone”，③は“既定値”のみ保存している、と考えている。

また、樋口(2004)では、これらのほかに、「合肥・陰平」や「蘭州・陽平」の後字軽声のような、

*本稿は、名古屋学院大学2001年度研究奨励金による研究成果の一部である。

地点	前字調類	単字調値	二音節語調値
合肥	陰平	21	21+23
蘭州	陽平	51	51+24

“低昇”タイプを認めた。

本稿では、以上のような見解に従って、昆明方言の所謂“重い軽声”を観察する。

1. 連読変調表

毛(1997)から得られる後字軽声二音節語語例を、筆者の聴覚的記述調値によって表にまとめると、以下の如くである。

後字が変調しないものを「後重」とし、後字が変調するものを「後軽」とする。「後軽」のうち、後字調値が、「33で現われるグループ」／「21で現われるグループ」を、それぞれ「後軽 a」／「後軽 b」とする。但し、後字陰平は、単字調(33)と同一調値で、「後重」であるか「後軽 a」であるかが判別できないので、以下の表では両者の間に置き、4.の表でも後字軽声の例としてカウントしない。「数」は得られた語例数を表わす。

前		後		陰平 33	数	陽平 31	数	上 53	数	去 212	数
陰平	33	後重	33+33	13		35+31	4	35+53	5	33+33	2
		後軽 a				33+33	7	33+33	1		
		後軽 b							35+21		
陽平	31	後重	31+33	13		31+31	5	31+53	10	31+212	4
		後軽 a				31+33	26	31+33	2	31+21	2
		後軽 b									
上	53	後重	53+33	9		53+31	3	53+53	8	53+212	3
		後軽 a				53+33	1	53+33	12	53+33	1
		後軽 b							53+21	1	
去	212	後重	212+33	6		212+31	6	212+53	9	212+212	2
		後軽 a				212+33	2			212+33	10
		後軽 b							212+21	1	

「陰平+去」の「後重」, 「陽平+去」の「後軽 a」および「去+上」の「後軽 a」は、例を得られなかった。

「後軽 b」は、後字去声の例のみ得られた。「陽平+去」, 「上+去」および「去+去」それぞれの「後重」／「後軽 b」は、後字調値が 212/21 の違いであるが、末尾の上昇の有り/無しが明らかに異なる。

2. 各形式所属語彙

得られた全ての各形式所属語彙を、形式別に以下に掲げる。

「陰平+陰平」(「後重/後軽 a」 33+33) 13 例

星期^{星期天}, 公鸡, 烟囱, 耶耶^{叔父}, 公公^{外祖父}, 医生, 伤风, 跔跔^{瘸子}, 背锅^{驼背}, 他家^{他(尊称)}, 中间^{当中}, 相因^{便宜}, 将将^刚。

「陰平+陽平」(「後重」 35+31) 4 例

升雷^{打雷}, 番茄^{西红柿}, 跔脚^{瘸子}, 将才^刚。

「陰平+陽平」(「後軽 a」 33+33) 7 例

松毛, 衣裳, 姑娘^{女孩子}, 猪油, 灯笼, 今年, 砖头。

「陰平+上」(「後重」 35+53) 5 例

包子, 花子^{乞丐}, 跔子, 高首^{上头}, 刚好^{正好}。

「陰平+上」(「後軽 a」 33+33) 1 例

挖苦。

「陰平+去」(「後軽 a」 33+33) 2 例

真个, 窗户。

「陰平+去」(「後軽 b」 35+21) 7 例

星宿^{星星}, 冰雹, 菠菜, 酸醋^醋, 清酱^{酱油}, 这个, 干净。

「陽平+陰平」(「後重/後軽 a」 31+33) 13 例

结冰, 刮风, 麦瓜^{南瓜}, 牙猪^{公猪}, 房间, 茅厕^{厕所}, 楼梯, 男呢^{丈夫}, 男人, 盐巴^盐, 调羹^{勺儿}, 厨师, 热乎^热, 才将^刚。

「陽平+陽平」(「後重」 31+31) 5 例

谷雀^{麻雀}, 麻雀, 壁虱^{臭虫}, 男人^{丈夫}, 十一。

「陽平+陽平」(「後軽 a」 31+33) 26 例

叔叔, 娃娃, 刷刷, 玩玩, 摇摇, 舌头, 指头, 木头, 石头, 骨头, 热头^{太阳}, 明年, 昨日^{昨天}, 指甲, 捶头^{拳头}, 婆婆^{外祖母}, 婆婆^{妻子}, 馒头, 热和^热, 锄头, 箩箩, 盒盒, 核核, 皮皮, 说说, 闲闲。

「陽平+上」(「後重」 31+53) 10 例

麦子, 茄子, 白薯, 房子, 门坎, 桌子, 鼻子, 脖子, 儿子, 厨子^{厨师}。

「陽平+上」(「後軽 a」 31+33) 2 例

牙齿, 云彩。

「陽平+去」(「後重」 31+21) 4 例

蚕豆, 洋芋^{马铃薯}, 瞧病^{看病}, 十二。

「陽平+去」(「後軽 b」 31+21) 2 例

月亮, 媳妇^{妻子}。

「上+陰平」(「後重/後軽 a」 53+33) 9 例

起风^{刮风}, 母猪, 草猪^{母猪}, 母鸡, 老爹^{祖父}, 女呢^{妻子}, 女人, 你家^{你(尊称)}, 我们, 底些^{下头}。

「上+陽平」(「後重」 53+31) 3 例

脑壳^头, 脑门^{额头}, 女人^{妻子}。

「上+陽平」(「後軽 a」 53+33) 1 例

老婆^{妻子}。

「上+上」(「後重」 53+53) 8 例

扯閃^閃电，老鼠，左手，婶^婶叔^母，早点^早饭，保姆，以首^里面，两^里。

「上+上」(「後軽 a」 53+33) 12 例

耳朵，姐姐，胆子，毯子，馆子，饺子，笋子，伙子，剪子，起子，海子^湖泊，组子。

「上+去」(「後重」 53+212) 3 例

早饭^午饭，晚饭，哪^样什么。

「上+去」(「後軽 a」 53+33) 1 例

底下。

「上+去」(「後軽 b」 53+21) 1 例

哪个^谁，哪^{一个}。

「去+陰平」(「後重/後軽 a」 212+33) 6 例

太^月阴^亮，大^伯爹^父，外^公外^祖父，舅^爹妈^妈的^哥哥，舅^耶妈^妈的^弟弟，舅^妈舅^母。

「去+陽平」(「後重」 212+31) 6 例

太^阳，下^雪，外^婆外^祖母，酱^油，二^十，第^一。

「去+陽平」(「後軽 a」 212+33) 2 例

去^年，灶^房厨^房。

「去+上」(「後重」 212+53) 9 例

下^雨，右^手，舅^母，病^了，自^己，上^首上^头，下^首下^头，外^首外^面，二^两。

「去+去」(「後重」 212+212) 2 例

罢^意故^意，第^二。

「去+去」(「後軽 a」 212+33) 10 例

记^性，妹^妹，舅^舅，谢^谢，看^看，褂^褂，架^架，盖^盖，带^带，洞^洞。

「去+去」(「後軽 b」 212+21) 1 例

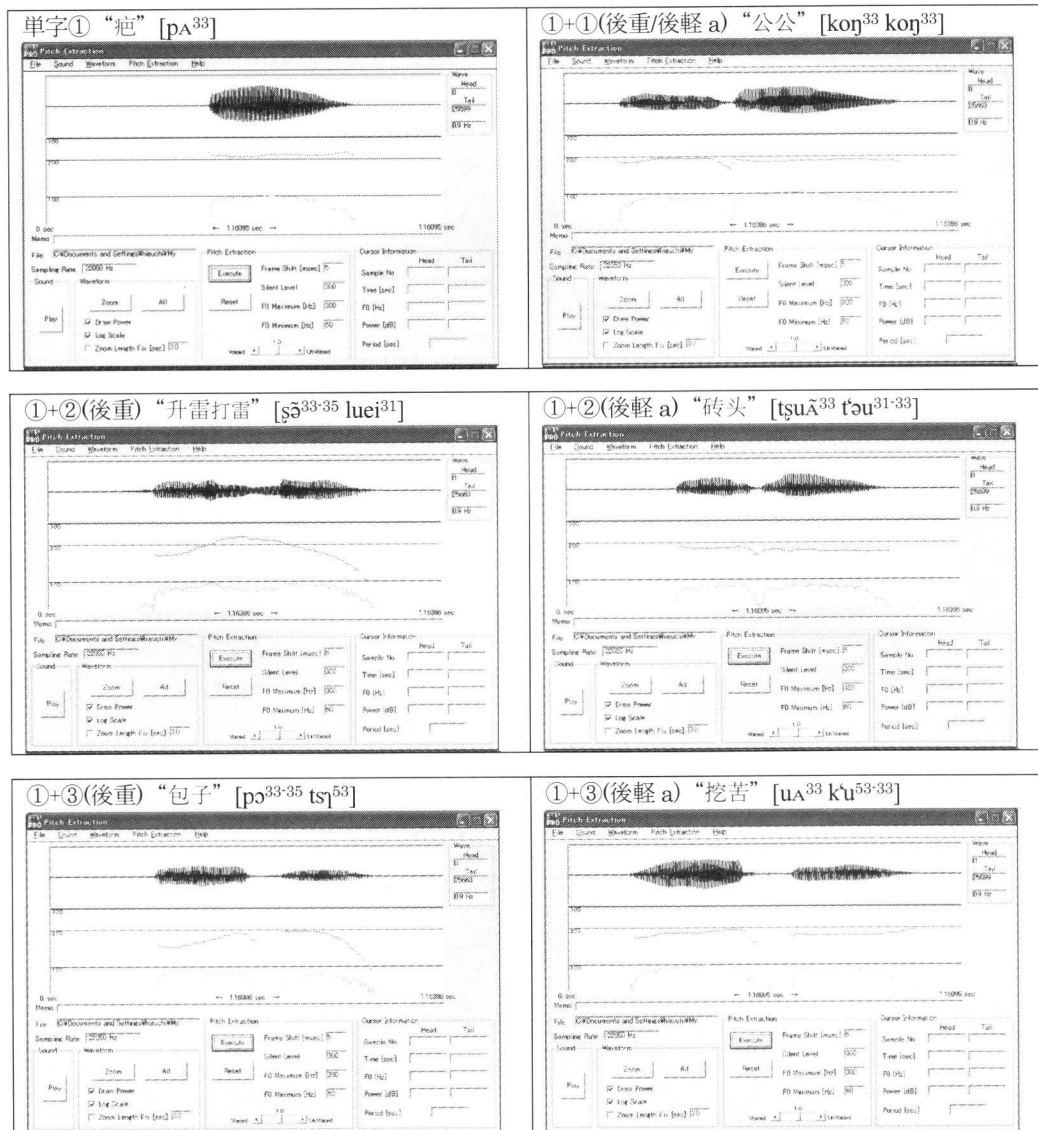
那个。

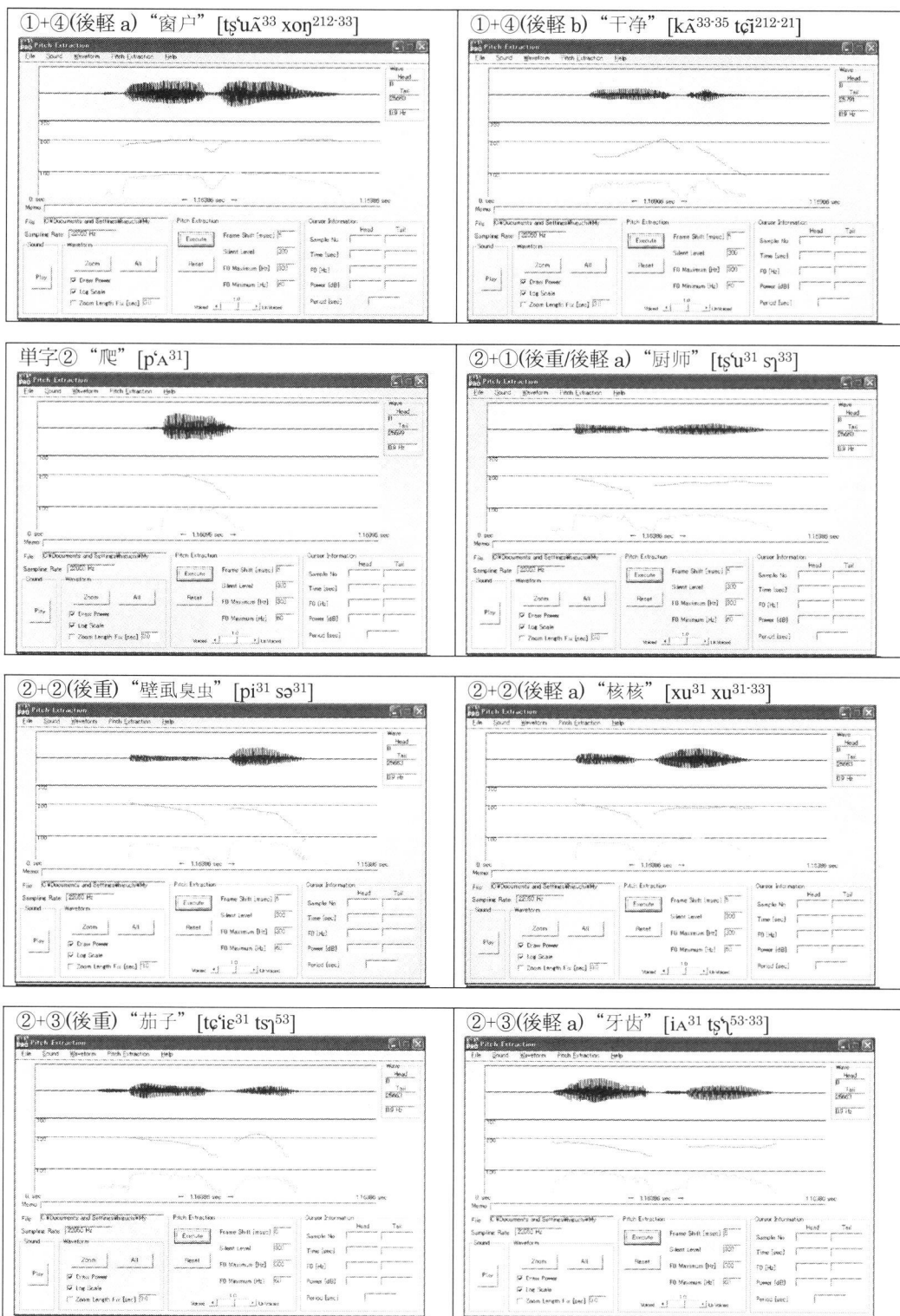
得られた例を見る限り，所属語彙には以下の如き傾向がある：

1. 動賓構造の語彙は，全て「後重」乃至「後重/後軽 a」(後字調値=各単字調値)に属している。
2. 重ね型の語彙は，上声以外では全て「後軽 a」乃至「後重/後軽 a」(後字調値 33)に属しているが，上声では「後重」(後字調値 53)に属す例と「後軽 a」(後字調値 33)に属す例とがある。
3. 接尾辞“子”は，前字上声以外では(前字去声の例は得られなかった)全て「後重」(後字調値 53)に属しているが，前字上声では「後軽 a」(後字調値 33)に属している。
4. 接尾辞“头”は，全て(前字上声および去声の例は得られなかった)「後軽 a」(後字調値 33)に属している。

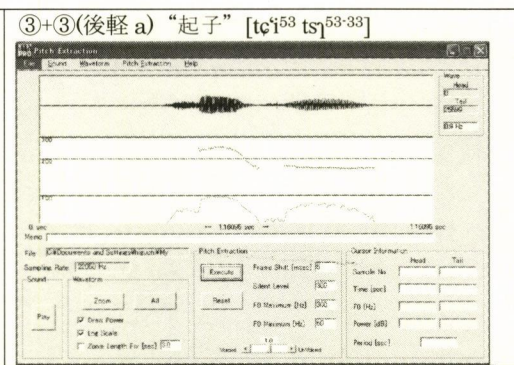
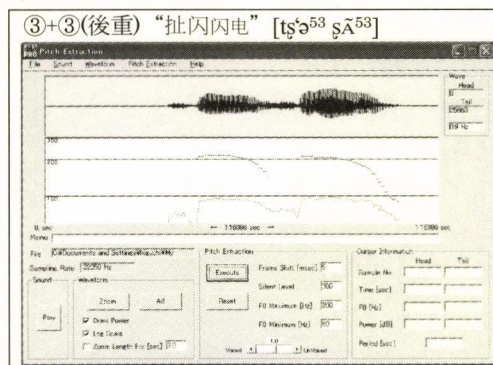
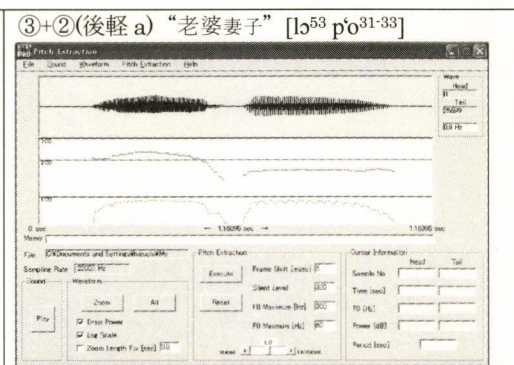
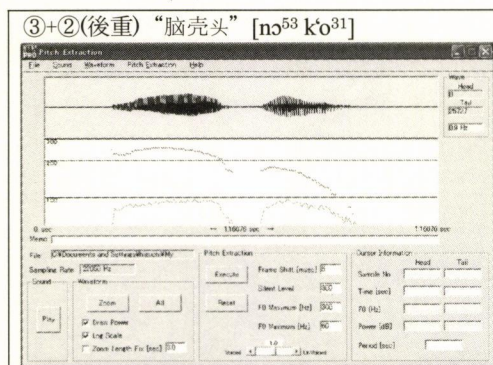
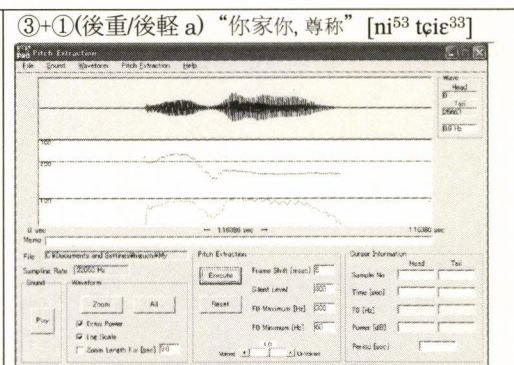
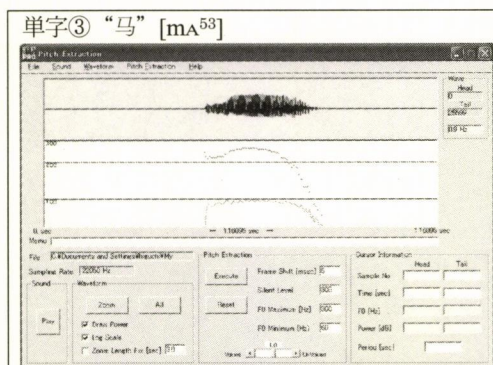
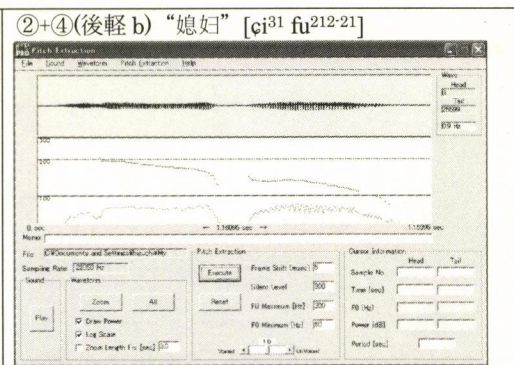
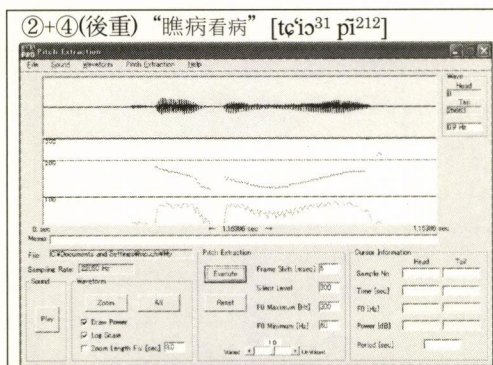
3. 各形式の例

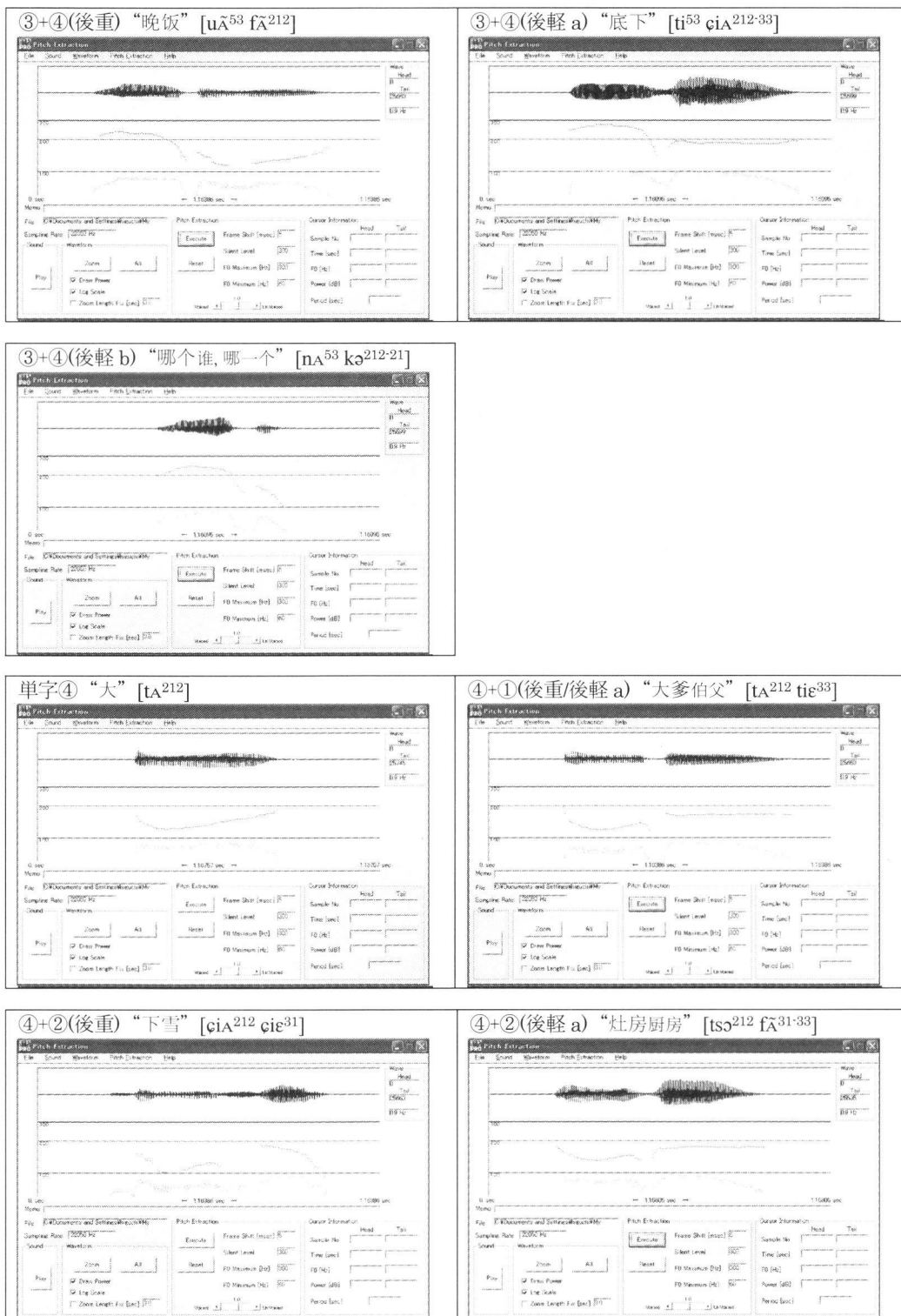
音声分析画面に表示した各形式の例を、以下に掲げる。陰平・陽平・上・去は、それぞれ①・②・③・④で表す。音声記述のうち、調値は筆者の聴覚的記述調値、それ以外は毛(1997)による。



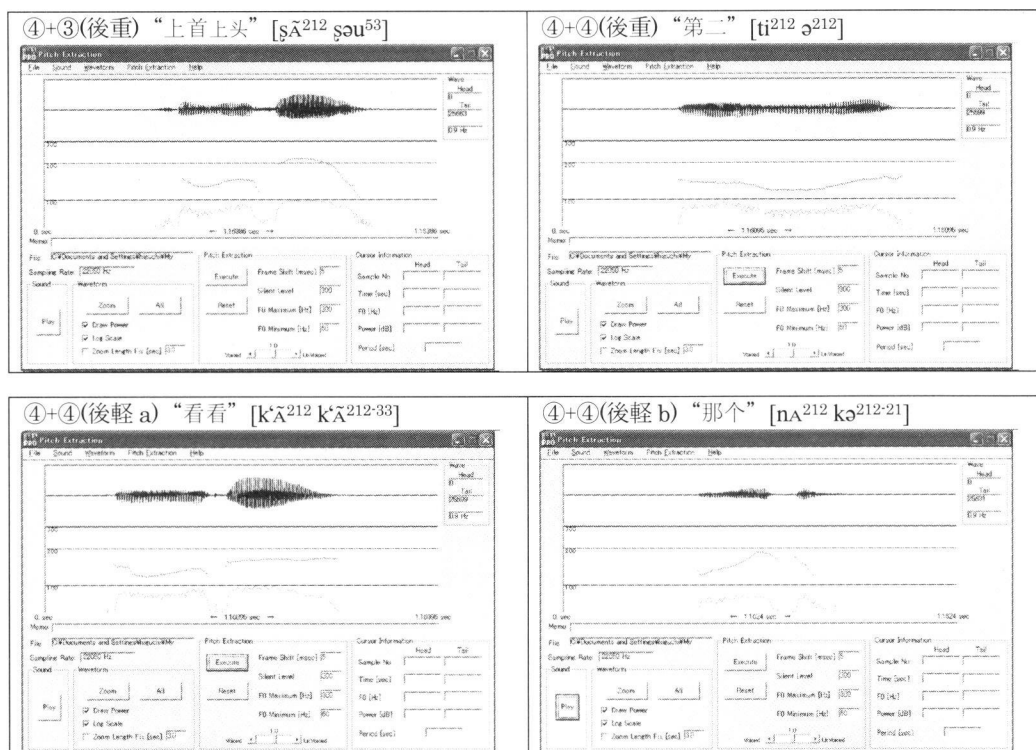


昆明方言における単字調および“轻声”を伴う二音節語の調形





昆明方言における単字調および“轻声”を伴う二音節語の調形



4. 分析結果

本稿では、韻母部分をその音節の長さとして測定した。

音響分析による調値は、石（1994：114）に従って、まず、各声調の始点・中点・終点の周波数（F₀）各平均値を次の公式に代入して算出し、

$\frac{x-b}{a-b} \times 5$	a = 全声調平均の最高周波数。
	b = 全声調平均の最低周波数。
	x = 各声調平均の各点における周波数。

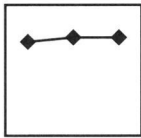

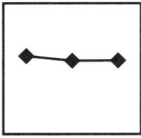
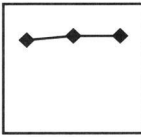
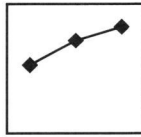
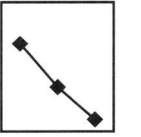
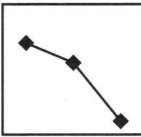
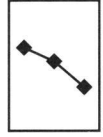
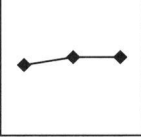
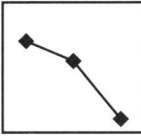
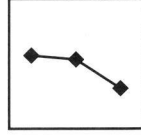
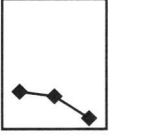
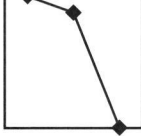
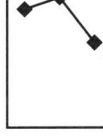
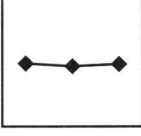
次に、得られた数値の 0～1 の間を 1，1～2 の間を 2，2～3 の間を 3，3～4 の間を 4，4～5 の間を 5，とそれぞれし、3 桁で表わした。

音節の絶対的な長さは捨棄した。前字に対する後字の相対的な長さを「後字／前字」により算出し、前字の長さを 1 として後字の長さを図示した。但し、後字の方が長い場合は、後字の長さを 1 として、前字の方を短く図示している。

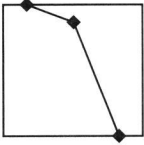
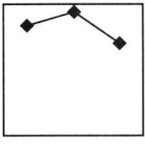
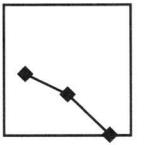
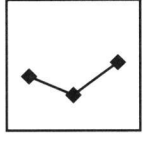

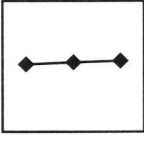


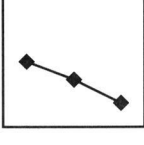
調類名の後の a, b などとは、その単字調類を前字とする後字轻声二音節語が、複数通りの調値を取る場合を示す。

「昆明・陰平 b」1形式は、単字調として現われる調素が後字軽声の前で変調しているのので、これについては、前字+後字の調形についてのみ、その他の場合に当てはめて述べる⁽⁴⁾。

以下では、O. で見た後字軽声の各タイプ，“Right Spreading”タイプ，“高降 (High Falling)”タイプ，“低昇 (Low Rising)”タイプ，“既定値 (Default Value)”保存タイプ、をそれぞれ“S”，“F”，“R”，“D”とする。

調類	タイプ ／語 例数	調値・調形			比 後/前	cf. 記述調値 上:『音档』/下:筆者		
		単字	前字	後字		単	前	後
陰平 a	S/L 10	444 平	343 平	333 中平	1.44	44 33	44 33	44 33
								
陰平 b	D 7	444 平	345 昇	421 降	0.79	44 33	44 35	212 21
								
陽平 a	L 28	431 降	432 降	333 中平	1.45	31 31	31 31	44 33
								
陽平 b	S/D 2	431 降	332 降	221 低降	0.77	31 31	31 31	212 21
								
上 a	L 14	551 降	554 降	333 中平	1.3	53 53	53 53	44 33
								

昆明方言における単字調および“轻声”を伴う二音節語の調形

上 b	S/D	551 降	554 降	321 低降	0.92	53	53	212
	1					53	53	21
去 a	S/L	323 降昇	322 降昇	333 中平	1.29	212	212	44
	12					212	212	33
去 b	D	323 降昇	233 昇	321 低降	1.00	212	212	212
	1					212	212	21

後字調形が“中平”である「陰平 a」, 「陽平 a」, 「上 a」, 「去 a」4 形式は, “中平 (Mid Level)” タイプ—略して“L”タイプ—という範疇を新たに立て, そこに属させることができよう。但し, これらのうち「陰平 a」, 「去 a」2 形式は, S タイプとも解釈できる。

後字調形が“降～低降”である「陰平 b」, 「陽平 b」, 「上 b」, 「去 b」4 形式は, D タイプである。但し, これらのうち「陽平 b」, 「上 b」2 形式は, S タイプとも解釈できる。また, 「陰平 b」1 形式は, 単字調として現われる調素が後字轻声の前で変調している。

長さに関しては, L (乃至 S/L) タイプのものは, 後字の方が前字より長く, D (乃至 S/D) タイプのものは, 後字が前字と同じぐらいの長さか, やや短い。

得られた語例数は, 単字各声調とも L (乃至 S/L) タイプの方が D (乃至 S/D) タイプより圧倒的に多い (前字陰平を除く)。

後字調形が“降～低降”であり, 且つ, 長さも前字より短めである D (乃至 S/D) タイプは, 後字去声にしか現われない。これは, “既定値” (“低”という“声域特性”) に近い調値 (212) を取る去声においては, “既定値” が保存され易かったためではなかろうか。

今回は既製のカセットテープという限られた条件および数量のデータを分析することしかできなかったもので, 得られなかった形式を含め, 今後データを増やす必要がある。また, 昆明だけでなく, 他の西南官話方言についても調べてみるべきであろう。

注

- (1) 扱った13種は以下の如くである：北京・哈爾濱・合肥・濟南・蘭州・南京・青島・天津・烏魯木齊・武漢・西安・銀川・鄭州。
- (2) 記述資料(毛1997)では“輕声”とはしていないが、二音節語の前字が決まると、その後字が、元の声調に関わらず中和されて、同一の調値を取るものを、本稿では輕声として扱う。
- (3) 音声データとしては「現代汉语方言音庫」(侯精一主編, 上海教育出版社)『音档』付属カセットテープの音声, また、音声分析ソフトとしては「音声録聞見 for Windows」(東京大学医学部音声言語研究施設, デイテル株式会社)を、それぞれ用いた。
- (4) 石(1988:101) 参照。「前字単字調和輕聲音詞不直接發生關係的, 如北京上聲和“老虎”[35+2]類輕聲音詞、安慶入聲和輕聲音詞, 則只考慮其變調調值跟輕聲後字在音高上的關係, 不追究其本調和變調之間的演變過程, 所以, 北京“老虎”這樣的輕聲音詞就可以歸入陽平開頭的輕聲音詞來進行討論。」

参考文献

- 樋口勇夫 2004 「漢語北方方言における単字調形と後字輕聲二音節語調形との關係」, 平成13-15年度科研費基盤研究(C)研究成果報告書『漢語諸方言における語聲調の実験音声学的研究』, 62-78頁。
- 岩田礼 1999 「论北京方言和连云港方言的高降輕聲及其历史含义：兼论吳語广用式變調的语音特征」, 『第五届汉语语言学国际研讨会论文集』, 139-164頁, 文鶴出版有限公司。
- 岩田礼 2001 「中国語の聲調とアクセント」, 『音声研究』5-1, 18-27頁, 日本音声学会。
- 毛玉玲 1997 『昆明話音档』, 侯精一主編, 上海教育出版社。
- 石鋒 1994 「关于声調分析的几个問題」, 『语音丛稿』, 111-122頁, 北京語言学院出版社。
- 石汝杰 1988 「说輕聲」, 『語言研究』第1期, 98-109頁。
- 汪化云 2003 「自主的輕聲和非自主的輕聲」, 『語文研究』第1期, 50-54頁。
- 魏鋼强 2000 「調值的輕聲和調类的輕聲」, 『方言』第1期, 20-29頁。